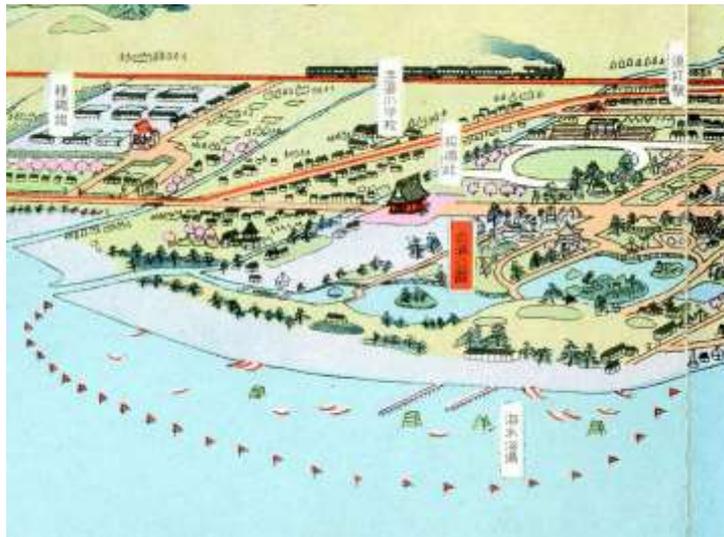


こんにちは！10月15日から新しい展示が始まりました。今回は「人物で紐解く近代スポーツ～あすなる国体から40年」というテーマで、青森に伝わった近代スポーツと、それらに関わった人々を紹介しています。

展示にあたり、以前に見た資料にあった「横内プール」という言葉がずっと気になっていたの
で、この機会に調べてみました。

大正時代、青森に近代的な水泳競技が伝えられると、合浦海水浴場や相馬町（現在の港町付近）
の海岸につくられた水泳場を利用して練習や大会が行われるようになりました。

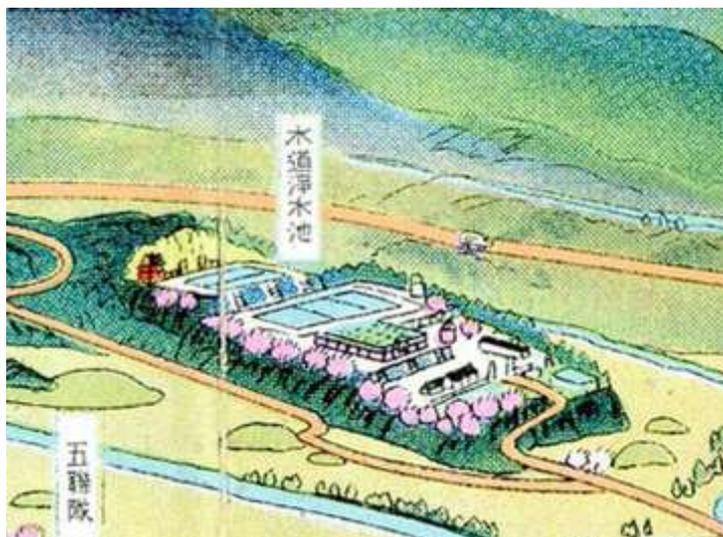


合浦海水浴場(昭和7年「青森市鳥瞰図」より)

しかし、青森は泳げる時期が短く、また海とプールでは浮力が違うため、ふだん海で泳いでいる青森の選手が全国大会の淡水プールで実力を発揮するのはやはり難しかったようです。そこで、なんとか青森にも淡水プールを！というのが水泳競技に関わる人々の悲願でしたが、資金の問題からなかなか実現できずにいました。

ところが、昭和11年(1936)、アジア初のオリンピックが昭和15年に東京で開催されることが決定すると、ぜひ青森県からも選手をとということで、横山実、岡本喜作、関野喜四郎らが発起人となり青森プール建設期成同盟会がつけられました。そして、各方面からの寄附と青森市の補助を受け、当時の東津軽郡横内村の浄水場近くにあった製氷プールを改造し、水泳プールを建設する事が決定します。そして、昭和12年7月初旬に着工、8月10日にはコンクリート製で25メートル7コースの立派なプールが完成し、9月5日には青森市主催、青森水泳協会後援の開設記念水泳大会も開催されました。また、このプールの建設には横内村の青年団員たちが農繁期にもかかわらず労力奉仕で協力しています。

しかし、翌13年の第12回県下中等学校小学校対抗競泳大会はこのプールを会場に開かれましたが、なぜかその次の年からは会場は合浦に戻ってしまいます。さらに昭和16年版『東奥年鑑』には「本県の水泳は好適なプール無く青森合浦公園が唯一のプール」と書かれていますので、この時点ではもう使われていないようです。



プールが建設された横内浄水場附近
(昭和7年「青森市鳥瞰図」より)

なぜ使われなくなったのか、はっきりとした理由はみつけれませんでした。ひとつには財政的な問題があったと思われます。プールの完成した段階で集まった寄附金は建設費の半分ほどに過ぎず、着工と同じ月に蘆溝橋事件が起きたこともあり、新聞には「時局重大の折柄、今後の寄附も容易ではないとみられる」とあります。また、青森市の財政も厳しく、さらに夏場は農家にとっても水は貴重なはずで早天となればプールに使うのは難しかったでしょう。そのうえ、昭和13年7月には日本はオリンピックの東京開催を返上してしまいます。こうしたことから、せっかくできた淡水プールも維持することが難しく、たった2年で姿を消してしまったのでしょうか。